

高浜虚子の「熱帯季題論」について
—『改訂 新歳時記』との関連を中心に—

呉 衛峰

東北公益文科大学総合研究論集第四十八号 抜刷

二〇二四年八月三十日発行

高浜虚子の「熱帯季題論」について

—『改訂 新歳時記』との関連を中心に—

呉 衛峰

はじめに

一九三四年（昭和九年）、高浜虚子は『新歳時記』¹を上梓した。新傾向派の凋落にともない、虚子は名実ともに俳壇の領袖になった。新興俳句を切り開く門下生の離反にも関わらず、「客観写生、花鳥諷詠」を唱える虚子のホトトギス派は俳壇の最大勢力となっていた。

よって、この時期における『新歳時記』の上梓は虚子が目指す俳句の新しい時代を示す一つの指針と考えてよからう。この二年後に虚子は、「今から十年前までは普通の人は俳句といふものは川柳と同じ位に考へてゐたが、それがこの頃になつて本当の俳句といふものを理解する人が余程殖ゑて来ましたね」と述懐したほどである。²俳句は日本の伝統的韻文の象徴である短歌と肩を並べるほど、「国民詩」の一つとして成長した。

虚子は序で季題（季語）の取捨の方針を示し、配列は大体東京を中心とすることを言明した。

(1) 高浜虚子の「熱帯季題論」について —『改訂 新歳時記』との関連を中心に—

俳句の季題として詩あるものを採り、然らざるものは捨てる。

現在行はれてゐるゐないに不拘、詩として諷詠するに足る季題は入れる。

世間では重きをなさぬ行事の題でも詩趣あるものは取る。

語調の悪いもの、冗長で作句に不便なものは改め或は捨てる。

選集に入選して居る類の題でも季題として重要でないものは削り、新題も詩題とするに足るものは採択する。³

俳句の季題を「詩あるもの」、「詩として」、「詩趣」、「詩題」と表現して、俳句が詩歌の一つのジャンルであり、新詩と同じ文芸性を持つてゐることを主張している。

一方、本書の出版年に注目すれば、日清戦争後の台湾併合、一九〇五年日露戦争後の南樺太領有と租借地大連の獲得、一九一〇年の朝鮮半島併合に次いで、一九三二年における日本の傀儡国家満洲国成立の二年後にあたることが分かる。俳句の発展は日本帝国の膨張とほぼ同期であり、季題も地理的膨張に合わせて広がっていった。

本稿は虚子の外地季語に関する一連の主張である「熱帯季題論」に関する資料を調べ、『新歳時記』およびその改訂版と照り合わせて、彼の内地・外地季題の考え方とそれをめぐる諸々の議論を考察するものである。

一

「熱帯季題論」については、以前、別の論考において簡潔に説明したことがある。⁴そもそも虚子の最初の外遊は一九一一年（明治四十四年）の朝鮮半島で、日本による朝鮮半島併合の翌年であった。それから一九二四年（大正十三年）に鮮満（朝鮮半島と旧満洲）旅行をし、一九二九年（昭和四年）は二度目の満洲旅行をした。

一九三六年（昭和十一年）前半、フランス留学の次男友次郎が日本に帰国する半年前に渡仏し、滞在の間ベルギー、ドイツ、イギリスを訪問した。ドイツとイギリスでは講演を行い、フランスではハイカイ作家たちと会見した。

ヨーロッパ滞在中、「熱帯季題小論」（以下「小論」）を日本の新聞に発表し、後に『渡仏日記』に収めた。⁶ フランスへ向かう途中、シンガポールに寄港した時のノートをもとに整理されたようである。その概要を以下のようにまとめる。

一、気候風土の違った熱帯地方での俳句創作は多くの問題を孕むことになる。

二、俳句は日本本土が生んだ文芸であるので、本土の歳時記にある季題を原則的に動かすべきでない。

三、熱帯で作句するという問題を解決するには、新たに夏の部に、熱帯という一部を設けて、熱帯の天文、地理、地名、動植物、様々な行事を置くことができる。

四、動物としては象、鰐、熱帯魚、極楽鳥、蜥蜴など、植物としてはゴム、椰子、檳榔樹、鳳凰樹、月下美人など、行事としては、馬來（マライ）正月、イスラム教の諸行事などを熱帯季題として置くことができる。

五、日本内地の季題に従って熱帯の花鳥諷詠することは不可能であるゆえ、これで熱帯に居住する俳人たちは清新な写生句を詠むことが可能になる。

六、『新歳時記』を改訂する時、熱帯の部を夏の部に追加したい。

七、台湾、ハワイ、南洋諸島もおおかたこれに準じてしかるべきである。

四年後の一九四〇年（昭和十五年）、『改訂 新歳時記』が上梓され、虚子の予告通り、熱帯季題が夏の部における七月季題の最後に置かれた。季題はほぼ「小論」で取り上げられたものであるが、一部の例句と合わせて掲げる。「○」の下は季題であり、「・」の下は例句である。

○熱帯…赤道を中心として南北緯度二十三度半の地帯。高温多雨で常夏の国である。

・熱帯の海は日を呑み終りたる

虚子

○赤道

・島に立つ赤道標や十字星

北浪

○馬來（マライ）正月…（例句なし）

○朝陰

・大船の朝陰曳いてゆきにけり

李一

○木蔭

・やゝありて潮の満ちくる木蔭かな

北浪

○オアシス

・オアシスは砂漠の島や葵咲く

楠窓

○貿易風

・国旗ふく貿易風は日もすがら

ましろ

○スコール…熱帯地方特有の爽快な驟雨。

・簷下にをどる独木舟（カヌー）やスコール来 圭草

○赤道祭…艦船などが赤道直下を通過する際に行はれる一種の祭儀、昔の帆船は多く之を行つたもので、今でも練習船などはよく之を行ふやうである。

・選ばれし赤道祭の女王かな

晴峰

○嫁選…新嘉坡辺では、着飾つた青年男女が海浜に出て、互に配偶を選ぶやうな行事をすることがある。

・菩提樹に隈なき月や嫁選び

梅女

○象

・バス行きて道きはまれば象に乗る

颯爽子

○水牛

・市中を水牛ありく夕立かな

圭児

○鰐

・王宮は鰐住む水に臨みけり

友次郎

○蟻（ふか）…南海を游戈し、巨大なるものは舟を覆し、人肉を喰ふ。

（例句なし）

○極楽鳥…風鳥のことである。（以下略、例句なし）

○熱帯魚

・玻璃の外の虫狙ひやまず熱帯魚

尤華

○火焰樹

・火焰樹の花と教へて手を翳す

楠窓

○無憂華（むゆうげ）…アソカとも云ふ。（以下略）

・無憂樹の華のかげりて蜂も去る

苦参

○鳳凰樹

・夕風や花落ちつゞく鳳凰樹

すなほ

○宝冠木…（例句なし）

○仏桑花（ぶっそうげ）…（前略）扶桑花。⁷

・扶桑花の長き垣あり異人墓地

梧朗

○ドリアン

・明易くドリアン落つる筈かな

楚江

○マンゴスチン…マラツカ原産の果実である。（以下略、例句なし）

○マンゴー

・マンゴー籠マニラ土産の友老いし

蒼石

○パパヤ

・パパイヤの木蔭に立ちて写真とる

秋野

○龍眼

・龍眼売値切りて妻に旅愁なし

夜牛

○バナナ

・バナナ買ふほどの馬來語覚えけり

三堂

○パイナップル…パイナップル即ち鳳梨（以下略）。

・日章旗や鳳梨熟す小学校

雨城

○椰子

・月の出や海へ斜の椰子一ト本

南斗

○檳榔樹

・檳榔子噛みゐて踊はじまらず

未曾二

○護謨樹（ごものき）

・ゴム落葉踏んで案内や四迷の碑

敬三

○榕樹…ガジマルといふ名で通つてゐる。（以下略）

・かじまるの上と下との猫の声

白山

○クロトン…（例句なし）

○月下美人…（前略） 女王花ともいふ。

・団欒に月下美人の咲きすゝむ

岬人

○ブルーゲンベリア…（前略） 筏かづらの名がある。

・夜霧とぶ筏蔓の花の門

今城

皮肉なことに、戦後一九五二年（昭和四十七年）に上梓された『新歳時記 増訂版』では、初版にあった「仏桑花」をふくめ、「熱帯季語」の部の季題は全部削除された。季題の政治性の現れであると言わざるをえない。

二

「小論」の発表後、同年六月に、虚子は「熱帯季題小論補遺」（以下「小論補遺」）を発表した。⁸ 様々な反響が出ていたようで、「小論」の立場をさらに明確にし、反対意見を含む反響に答える内容でありながら、「熱帯季題」から「寒帯季題」に広がった。

熱帯の居住者から見れば、熱帯にも春夏秋冬が存在する主張に対して、「小論補遺」は以下のような答えている。

俳句はどこまでも日本の歳時記が根底をなしてゐる。仏蘭西の歳時記、亜米利加の歳時記を作つてもいいが、併し日本の歳時記を宗としなければならぬ。また台湾の歳時記、北海道の歳時記を作つてもいいが、内地の歳時記を宗としなければならぬ。

という、東京中心の内地歳時記をすべての歳時記の基準にしなければならぬという考えを繰り返している。

「小論補遺」の発表時期と相前後する時期か、虚子がフランスから日本へ戻る途中に台湾へ数時間立ち寄り、台湾の俳句結社のメンバーから歓迎を受けた。虚子は山本孕江という現地俳人から台湾の四季の存在について熱く語られたようである。

（前略）孕江君が、私の「熱帯季題論」に反対し、台湾にも四季は現存してをる、之を夏の季に一括して了ふとするのは無理である、内地の人がたまたま来て台湾は暑いといつてしまへばそえまで、あるが、親しく此處に住まつて居ると春暖を感じ秋冷を感じるのとはよりのこと、又、夏の暑さ冬の寒さも同じ安住して生活して居るのが吾等台湾の俳人であつて台湾の俳句を確立しなければならぬ。といふやうな事を極めて熱心に（中略）話すのであつた。⁹

山本の話に対して、虚子は以下のように答えた。

私は台湾の歳時記、新嘉坡の歳時記、ブラジルの歳時記等が出来ることも結構なことであるが、其等の土地におのおの俳句が盛んになつて来て俳人の数が殖えて来て、独立して一つの俳句国を成すに至ればそれで結構であるそれ

で結構である許りで無く、是非さうあらねばなんのである。が、日本本土に興つた歳時記を基準として、其歳時記は動かすべからざる尊厳なるものとして、熱帯の如きは一括して「夏」の季に概算すべきものである。さうでなければ内地の季題に混乱を来して収拾すべからざるものになる。と言ふことをいつた。

このダブルスタンダード的曖昧さはどういう意味か、やや難解に感じられなくもないが、日本本土、すなわち内地の俳人が東京中心の季題を基準にし、そこから放射的に離れていく時は東京から見れば「常夏」の土地であるなら、季題はすべて「夏」の部になり、「熱帯季題」となるべきであると主張しているのであろうか。実際、この時期の満洲俳句の季題（季語）の在地化が進み、台湾の俳人たちが感じていることと何ら異なることはなかったのである。¹⁰

ここから虚子は寒帯にも熱帯同様の季題論を展開する。

それに関連して例へば日本の北端に行くと寒帯地方の風物は冬の季になるのかといふ質問が出るだらうと思ひますが、寒帯の方は凡てが寂滅してしまふ方で、例へば氷とか雪とかさういふものになつて了ふ。其中で北極光といふものゝ又馴鹿といふもの、さういふものは熱帯に準じて冬の季題としたいといふ要求があればそれもいゝと思ふ。

『改訂 新歳時記』では、「北極光」と「馴鹿」が寒帯季題として冬の部の最後に置かれているが、例句はなく、戦後の『新歳時記 増訂版』では削除されている。

虚子は「熱帯季題論」を唱へ始めるまですでに朝鮮半島と旧満洲を数回訪れたが、「寒帯季題論」を提起しなかった。その理由を考えれば、日清戦争および日露戦争以降、朝鮮半島と旧満洲への移住者が多く、寒帯特有の季語も自然に日本語に入ったのである。たとえば満洲季語でよく使われる「三寒四温」という言葉は、以下の二例の如く、かなり早い

時期に日本に伝わった。

一八九三年…

仁川港付近地方ハ俗ニ三寒四温ト称シ往々極寒中ト雖モ零度ヨリ一騰三十度ニ至ルコトアリ。¹¹

一八九六年…

我旧藩士国分高胤なん人あり早く清国に來りて安東県民生庁に奉職せり其地方に三寒四温と云ふ俗語あり其は寒冷三日続けば其次四日間は温暖なり。¹²

『新歲時記』の初版には「三寒四温」が冬の季語として掲載されている。その説明は「満洲・朝鮮の気温には三日寒い日がつゞくとあと四日温い日があるといふやうに」で始まるが、戦後の『新歲時記 増訂版』では、「満洲・朝鮮の気温には」という数文字のみ削除されており、その他は例句を含め初版と同じである。

三

「熱帯季題論」という自己矛盾を含んでいる主張は、すぐ様々な議論を引き起こした。「小論」が発表されてから、新傾向派の領袖であった河東碧梧桐はすでに俳壇から引退して反論がなかったが、新傾向の流れから生まれた自由律の荻原井泉水が翌月、「俳句の起上る時」と題する反論の文章を東京の新聞に発表した。¹³その内容を以下にまとめる。

一、日本の文学は東京から京都までの北緯三十五度の線上に発展されてきた東西中心のもので、季題の精神は温带日本
の四季の均等的な長さ起因する。

二、伝統的な季題の東西中心主義は、古い日本でも、東西の北緯三十五度以外の青森や鹿児島ではその非合理性が気づかれていた。同時に、文化の中心である東西地域に合わせようとする地方の俳人も多くいる。

三、明治以来、日本は北は樺太・朝鮮・満洲へ、南は台湾へと南北的に伸びてきたため、東西中心の歳時記の非合理性はますます目に余るものとなった。

四、東西中心の季題に寝転がっている人々が目を覚まして起き上ろうとする時に発表された虚子の「小論」は「熱帯季語」という掛け布団を作り、続けて寝させようとしているようなものである。

五、季題と写実是一对の矛盾である。季題は季節や自然の真実を写すというより、季節の「らしさ」という観念的なものである。そこに写実を両立させようとすると、嘘の文芸になってしまう。

六、「熱帯季語」は、熱帯のローカルな真実を無視するものであるゆえ、その狙いとは逆に、無季俳句と同じことになる。

有季定型の立場から見ても、無季を主張するところを除けば、井泉水の論点はおおかた適切なものであると言えよう。日本文学の東西中心的発展はすでに周知の事となっており、四季の長さの均等性という考えは現在環境批判理論などから否定されている。六の指摘は虚子の論点の自己矛盾を明らかにし、「熱帯季語」や「寒帯季語」は旧満洲の俳句評論においても、在地俳人から「旅行者の俳句」の特徴と見られていた。

一方、ホトトギス派内部でも、虚子の大原則を尊重するという建前のもとで、永田青嵐（秀次郎）の「熱帯季題の考へ方」のような反論が出ている。時代背景もあって、青嵐は熱帯でも温带でも寒帯でもそれぞれの土地ではそれぞれ

の独特な季節感があることを強調し、それに対して、

就ては熱帯の俳句は常夏の俳句として一括して夏の季とし、或は又南米の高原の地方の如くに常春の季とする態度に就ては日本人としては無理ならぬ感情であるが、此問題は或る範圍の余裕ある態度を希望したのである。

「余裕ある態度を希望したい」というのは、戦時下の内地中心主義的態度ですべてを済まさないでほしいことであろう。そこで彼は以下の意見を述べる。

要するに熱帯の俳句は何処迄も熱帯の俳句であつて日本の歳時記による春夏秋冬を有する詩では無い。冬の無い国では夏も無い、随つて夏と言ふ季感も連想も興趣も無い、之を常夏の国と言つての夏季感を感じるのは熱帯人の感情では無くして温帯人が熱帯に旅行した旅行者の感情に過ぎ無いと思ふ。

満洲俳句評論の「旅行者」という言葉はここにも現れたことは、とどのつまり外地俳句への態度にはどうしても内地旅行者の上から目線が感じられたのである。青嵐は旅行者の虚子と違つて「山本孕江が台湾の歳時記を確立して台湾の俳句を建設したいと言はれたさうであるが、之は私の考では至極当然であつて何の不思議も感じない」と明言した。

日本の国内だけで考へて見ても歳時記は京都地方を中心として考へられたものであるから樺太や琉球には当はまらない、況や台湾に於ておや、南洋に於ておや、である。（中略）八紘二字の精神は各民族をして各其所を得せしむるにあるとすれば、我俳句に於ても寒帯温帯熱帯各其所を得せしむる寛容の態度があつてほしい、之を「俳句の自

治」とでも言ひたい。

東西中心主義への認識は「敵陣」の井泉水に近いと言えよう。「俳句の自治」はローカル尊重の脱中心主義の態度に見える。植民地帝国日本の多言語多文化的な国策に詳しい青風は政治的に老獪であるが、俳句に限っては彼の考え方は正論であると認めよう。

青風の論に対する反応の一つは、佐藤漾人がその翌月に発表した「『熱帯季題』に関連して」¹⁵である。青風の考えを全体的に肯定しながら、季題、つまり季の変化が（少なくともホトトギス派の）俳句の要件である以上、季の変化の少ない地域では俳句が育ちにくいという結果になると力説し、そしてフランスのハイカイのような季題を否定したものは、結局「俳句」とは言えないと結論する。

おわりに

以上考察したように、様々な議論を呼び起こしながら、虚子の「熱帯季題論」は必ずしも成功したとは言えない。時代的背景において、内地中心の「旅行者の感情」にこだわったからであろうか。ただ、季題（季語）を要件とする「花鳥諷詠」を唱えて俳句の大衆化＝国民詩化を成し遂げ、その後の俳句国際化の試行錯誤の一つとして考えても良からう。最後に、戦時中の『俳句研究』における「大東亜俳句圏」というコラムの内容を時間順に簡単にまとめ、本稿を結ぶ。

一、天津（北支）…一九四二年に俳誌の一元化として『春聯』が創刊され、北京・天津・青島・済南・徐州・大同・張家口などに同人会がある。天津における俳句の歴史は一九〇〇年（明治三十三年）に始まり、明治末期に「天津俳楽会」が創立し、一九四三年現在では「春聯」「ホトトギス」「雲母」の他、「寒雷」「白河吟社」「秋の完会」

「内外吟社」などの句会がある。¹⁶

二、関東州…大連では「ホトトギス派」俳人が多く、俳誌『平原』を刊行していたが、一九四一年に『満州俳句通信』と合併し、『鶉』が刊行されるようになった。¹⁷

三、武漢…日中戦争以降に「武漢俳句会」が結成され、一九四二年六月に俳誌『菱花』が創刊された。¹⁸

四、北京…北京ホトトギス会、雲母北京支社、石楠派の成紀句会など多くの句会があり、一九四二年二月に俳誌『春聯』が創刊された。¹⁹

五、青島…昭和七八年（一九三二年か三三年）にアオミ吟社が生まれ、『北支俳陣』という華北最初の俳誌が刊行されるようになった。その後ホトトギス会、天の川会、さいかち句会、霧笛句会、蛩雪句会などがあり、あらたに俳誌『基地』が創刊された。²⁰

六、京城…日中戦争以降、俳壇全体は凋落し、多くの俳誌が廃刊となった。その後「朝鮮俳句作家協会」が設立され、機関誌『水砒』が発刊された。各種新聞に紙上俳壇がある。

七、満洲…古くから俳誌『白楊』、『山楂子』があり、日中戦争後『柳絮』が発刊された。哈爾浜には『韃靼』があった。一九四三年三月に俳誌が統合され、『俳句満洲』が創刊された。²¹

八、パオ…二十年前からホトトギス派の花椰子吟社が起り、今日に至る。その他、昌南倶楽部俳句部がある。発表機関としては現地文化協会機関誌『南洋群島』と新聞『南洋新報』がある。²²

九、比島（フィリピン）…比島軍政監部陸運管理部俳句会がある。²³

十、台湾…アジア・太平洋戦争開始後に俳壇が凋落した。ホトトギス同人の山本孕江主宰の『ゆうかり』あり、二十四年の歴史を誇る。全島の都市に支社がある。その他、俳誌『竹鷄』と石楠派の『積雲』がある。²⁴

十一、南樺太…初期に初音吟社、落葉会、亜庭吟社があったが、一九二四年（大正十三年）に氷下魚が結成され、俳

誌『氷下魚』が刊行されるようになった。²⁵

注

1 三省堂、一九三四年一月。本稿では旧漢字は通用漢字に直してある。

2 『ホトトギス』四十巻四号、ホトトギス社、一九三七年一月。五四頁。

3 『新歳時記』、二頁。

4 呉衛峰「満州俳句の季語についての一考察——『樹氷』における「北満季語解」を中心に」『東北公益文科大学総合研究論集』第四十五号、二〇二三年七月三十一日。(一)～(二)頁。

5 年表では四月九日『大阪毎日新聞』、四月十四・十五日『東京日日新聞』掲載とあるが、未見。

6 改造社、一九三六年八月。四〇二～四〇六頁。

7 『新歳時記』初版にも掲載されているが、『改訂 新歳時記』では、熱帯季題の部分に移動された。

8 『ホトトギス』三十九巻九号、ホトトギス社、一九三六年六月。一～三頁。

9 『ホトトギス』四十六巻七号、ホトトギス社、一九四三年四月。十七頁。初出は『山本孕江句集』、山本孕江句集刊行会、一九四二年十一月、高浜虚子「序」、一～十一頁。

10 呉衛峰「満州俳句の季語についての一考察——『樹氷』における「北満季語解」を中心に」『東北公益文科大学総合研究論集』第四十五号(二〇二三年七月)、「満州俳句の季語について——南満州を中心に」『東北公益文科大学総合研究論集』第四十七号(二〇二四年三月)を参照。

11 大蔵省印刷局編『官報』第二九〇二号、一九九三年三月六日(明治二十六年)、七四頁。

12 渡辺重綱『征清紀行』、白関書屋、一九九六年二月(明治二十九年)、八七頁。

13 「俳句の起上る時」『俳句する心』、子文書店、一九三九年五月、一六三～一六八頁。初出は「東京朝日新聞」、一九三六年五月二十三日、未見。

14 『ホトトギス』四十六卷八号、ホトトギス社、一九四三年五月、二～三頁。

15 『ホトトギス』四十六卷九号、ホトトギス社、一九四三年六月、六頁。

16 『俳句研究』十卷二号、改造社、一九四三年二月、三三～三六頁。

17 同上、十卷三号、一九四三年三月、七一頁。

18 同上、十卷四号、一九四三年四月、五〇頁。

19 同上、十卷五号、一九四三年五月、二四～二五頁。

20 同上、十卷六号、一九四三年六月、四六～四七頁。

21 同上、十卷八号、一九四三年八月、二六～二九頁。

22 同上、十卷九号、一九四三年九月、二〇～二二頁。

23 同上、十一卷二号、一九四四年二月、三九頁。

24 同上、十一卷五号、一九四四年五月、二二頁。

25 同上、十一卷六号、一九四四年六月、十三頁。